Ⅱ　推定第一次朝堂院南門の調査（第119次）

推定第一次朝堂院地区はこれまで第27・72・75・77・97・102・111次及び今年度の117次の調査が実施され、この地区の北部及び東側部分での変遷の様相が明らかになってきている。また、これらの調査結果から第一次朝堂院地区の東西幅が720尺に復原されている。一方朱雀門地区については、第16・17次（昭和39年）の調査によって、朱雀門を確認したが、朝堂院の南を限ると考えられる応天門相当位置では門等は存在しないことが明らかになった。

今回の第119次調査は第1次朝堂院南門の検出を目的として行なったものである。中央部を南北に幅2mの溝が流れ、東西には構内道路及びU型溝と6千v高圧電線が通っていた。道路敷は遺存地割から築地の存在が予想されていたところである。調査地区は平城宮跡の調査地区標示で6ABV・6ABWの各C・E地区である。

宮造営以前の旧地表は、調査区（南北約40m、東西約50m）内で北から南へ緩く傾斜しており、約25cmの高低差がある。東西方向は東で約15cm低くなっており、東南隅部分では特に約30cm低い。地山は全体的にシルト又は細砂がベースになっており、西北部分で灰褐色の粘質土が覆っている。この灰褐粘質土は東へ行くに従い砂質土に変る。また、南東部分では明黄褐色粘土が地山となっているが部分的に暗褐色粘土が覆うところもある。宮の造営に伴い整地が行われるが、全面を覆うような整地は見られず、部分的な整地である。

遺　構

今回検出した主要な遺構は、建物4棟・塀6条・溝15条・土坑3基・道路・凝灰岩と塼を用いた施設などである。これらの遺構は6時期に分けることができる。

A期以前　　平城宮造営以前の遺構で、下ツ道の東西側溝であるSD1860及びSD1900がある。

SD1860は発掘区東半部中央を流れる南北溝であり、2ケ所でこれを確認した。幅は南で約1.8m、北で1.3mであり、深さは南で約1.0m、北で約0.4mを測った。遺物は含まれていない。

ＳＤ1900は発掘区西半部中央を流れる南北溝で、３ケ所で確認、幅は約2.9ｍ、深さは南で約0.6ｍ、北で約0.7ｍであった。なお、溝底のレベル差は40ｍの区間で約0.15ｍであった。調査区内での両溝心々距離は北で24.05ｍ、南で24.9ｍである。なお、朱雀門地区で検出した両溝心々距離は24.5ｍである。

Ａ期　平城宮の造営が始められてから、朝堂院南門ＳＢ9200が建設されるまでの時期である。この時期の遺構としてはＳＡ9199・9201Ａ・9202Ａがある。ＳＡ9199の時期とＳＡ9201Ａ及びＳＡ9202Ａの時期の２小期に分かれる。

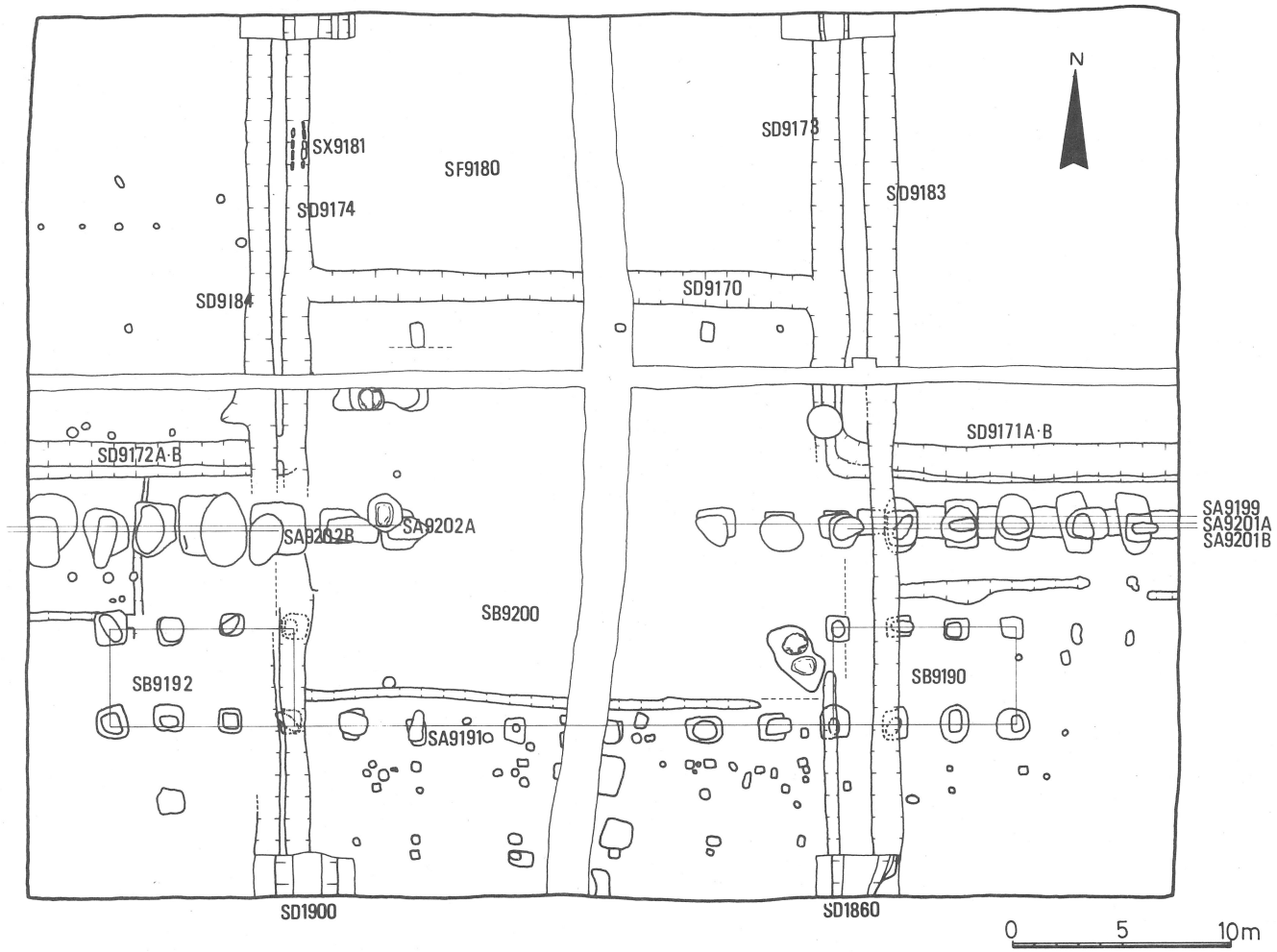
ＳＡ9199は発掘区東部中央で検出した掘立柱東西塀である。９尺等間で５間分を検出した。この柱穴は一辺が1.0ｍ～1.5ｍのほぼ方形の掘形で、柱痕跡や柱抜取痕跡をもたない。掘形の東西辺は、西端のものを除きすべて次の時期の東西塀ＳＡ9201の柱掘形又は柱抜取痕跡と重複している。深さは1.3ｍである。このＳＡ9199はトレンチ東端から５間分で終っており、それより西へは延びない。

ＳＡ9201Ａは発掘区東部中央で検出した７間以上９尺等間の掘立柱塀で更に東へ延びる。西２間分は門ＳＢ9200の掘込地業下で検出した。柱掘形は長方形から楕円形に近く、長径３ｍに及ぶものもある。

ＳＡ9202ＡはＳＡ9201Ａと一連の、朝堂院南北中軸線に対称の位置にある掘立柱塀（９尺等間）である。断ち割り調査でＳＢ9200の掘込地業下で１間分と次の時期に属するＳＡ9202Ｂの柱掘形の底で確認したものである。ＳＡ9201ＡとＳＡ9202Ａとの間は50尺で、閉塞施設は設けていない。

Ｂ期　この時期の遺構は、朝堂院南門であるＳＢ9200とＳＡ9201Ｂ・9202B及びＳＦ9180がある。

ＳＢ9200は基壇上に建つ東西棟の礎石建物で、第１次朝堂院地区の南門である。基壇はほとんど削平を受け、根石や礎石据え付け穴、地覆抜取痕跡等は残っていなかったが、掘込地業の範囲を確認することができた。地業規模は東西26.0ｍ、南北16.0ｍで深さは0.35ｍである。掘込地業は地山面から掘り込んでおり、深さは比較的浅い。地業は層状に築成していて各層５㎝位の厚さである。旧地表のレベルまで築成した段階で拳大の礫を混ぜて地盤強化の一助としている。



第3図　第119次発掘遺構図

基壇規模はわからないが、掘込地業東縁部で残存基壇版築層の上から3～5番目の層である暗灰褐粘土層が地業東端から東へ約0.25m延びている。また、地業北縁部では版築層が地業北端から約0.9m南側で切れている。こうしたことから、基壇は東西方向では掘込地業より大きく、南北方向では小さい規模をもっていたと想定できる。門の規模は桁行5間、梁行2間、柱間寸法15尺等間程度の規模と復原できる。なお、土坑SK9196など3つの土坑には4個の礎石が投棄されていた。これらの礎石は各々柱座や地覆座が造り出されていた。

SA9201B・SA9202Bは門SB9200の両側面中央に取り付く東西方向の掘立柱塀である。SA9201Bは5間分以上（9尺等間）を検出した。柱掘形は円形乃至隅丸方形、1辺1.5mの大きさでSA9201Aの柱掘形と重複している。すべて柱抜取痕跡があるが、抜き取る方向に顕著な規則性はない。SA9202Bは4間分（9尺等間）を検出した。この柱掘形は相互に接する程の大きさで抜取痕跡がある。東端の掘形の底に厚さ10cmの長方形の礎板が2枚重ねて置かれていた。

SF9180は朝堂院南門の北側通路敷で直径10cm前後の河原石を敷き並べている。東側は南北溝SD9183付近までのび、西側は南北溝SD9174付近で終る。両端部を明示する施設はないが、後の時期の溝であるSD9183、SD9174で破壊されたのではないかと考えられる。

C期　この時期の遺構には、SA9191、SB9190・9192がある。

SA9191はSB9190・9192の中間をつなぐ7間の掘立柱塀で、両建物の南側柱列と柱筋を揃える。柱間寸法は中央3間が15尺等間、東西各2間は9.5尺等間である。SB9190・SB9192は全く同じ平面規模をもち、桁行3間9.5尺等間、梁行1間15尺の東西棟掘立柱建物である。それぞれの中軸寄りの柱掘形はSB9200の掘込地業と重複している。SA9191、SB9190・9192はその配置等から一体となった施設で、SB9200を撤去した後南側を閉塞している状態である。なおSA9201B、SA9202Bは存続していたものと思われる。

D期　この時期の遺構としてはSD9170・9171・9172・SD9173・9174、SX9181及びSB9205がある。溝の付け替えによって2小期にわかれる。

SD9170は掘立柱塀SA9201の北約11mのところにある東西溝で、SD9173・SD9174と合流する。これらの溝は同時に廃絶される。SD9170は延長約23m、幅2m弱、深さ約0.4mで多量の瓦が投棄されていた。

SD9173A・SD9174Aは南北溝でSA9201及びSA9202の北3mのところで各々東西に曲りSD9171A・SD9172Aになる。SD9173A・SD9174A共に幅約1.2m前後、深さ0.2～0.5mである。

SD9173B・SD9174BはSD9173A・SD9174Aが南に直流するように付け替えられた南北溝で、SD9173は幅約0.4m、SD9174Bは幅約0.8mで深さは共に約0.2mである。SD9170との合流点から南にかけて多量の瓦が投棄されており、SD9174には特に人頭大の河原石及び凝灰岩片が多く投棄されていた。

SD9171A・SD9172Aは南北溝SD9173A・SD9174Aとつながる東西溝で、掘立柱塀SA9201・SA9202の北3mで検出された。既にこれらの掘立柱塀はなくこれに代る施設の痕跡も見付かっていない。しかし第一次朝堂院地区東辺での調査結果からこの時期には築地塀が作られていたと考えられ、SD9171及びSD9172はこの築地塀の北側雨落溝ではないかと考えられる。溝幅は約1.0m、深さ0.3～0.4mである。

SD9171B・SD9172BはSD9171A・SD9172Aを埋め、北へ約0.7mずらした東西溝で幅1.0～1.4m、深さ約0.3mある。埋土には多量の瓦を含んでいた。

SX9181はSD9174とSD9170合流点の北約6mにあり、東西両岸に2.2mにわたって塼と凝灰岩を並べたてたものである。南北両端に塼を立て、中央部に凝灰岩を用い、それぞれ東西相対して大きさをそろえている。性格は不明であるが溝を渡る施設の一部かと思われる。

SB9205はSB9200の跡に建てられたと想定されるひとまわり小さい朝堂院南門である。このSB9205に関連する門や基壇等の遺構は痕跡をとどめていないが、C期のSA9191等の施設は既に廃絶されているのでこの地区に何らかの閉塞施設が必要であり、またこの時期の溝の状況やそれらの溝の埋土に含まれる多量の瓦からみて何らかの構築物の存在が想定される。門の平面構成は桁行5間、梁行2

間、柱間寸法13尺等間で、基壇上に建つ礎石建物を考えることができる。

E期　この時期に属する遺構としてはSD9183・SD9184がある。

SD9183はSD9173の東約2.5mに掘られた幅約1.6m、深さ約0.2mの南北溝である。SD9184はSD9174の西約1.7mに掘られた南北溝で、幅約1.0m、深さは約0.2mである。両溝間の心々距離は約28.3mである。この時期には、門SB9205や築地塀等の施設は廃絶している。

遺　物

瓦塼類は多量に出土したが、主要なものは軒丸瓦106点、軒平瓦123点、鬼瓦5点、面戸瓦8点、熨斗瓦1点などである。軒瓦は平城宮I期の瓦が全体の90%（187点）を占め、II期が14点、III期が6点出土したにすぎない。I期の瓦のうち藤原宮式の瓦は多くの型式にわたっていて、10型式85点が出土した。その他は6284型式と6668型式に限定されていて、それぞれ36点と39点出土した。

出土した瓦のうち、直接遺構に伴って出土したものは93点で、そのうち溝SD9170から38点出土するなどD期の遺構に伴うものが67%63点あり、うち90%がI期の瓦である。鬼瓦はすべて獣身文である。その他の遺物には土器片が若干ある。

ま　と　め

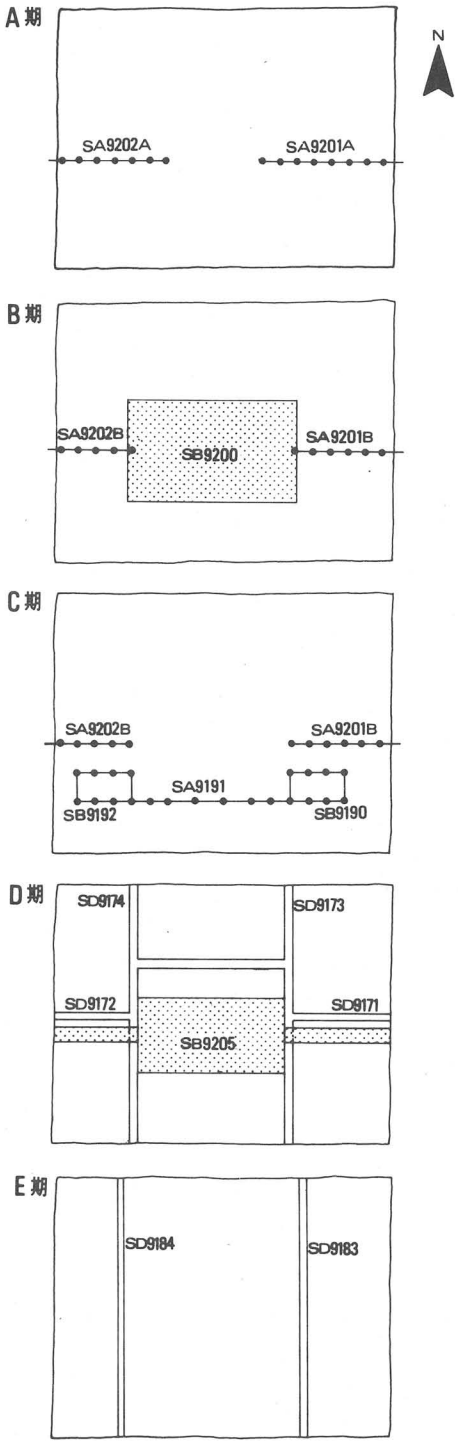
これまでの調査結果に基づき、第一次朝堂院地区の東西規模は約720尺（215m）と復原されている。今回の調査の結果、この朝堂院地区の南門SB9200とそれに取り付く掘立柱塀SA9201・SA9202を検出することができた。これによって第77次調査で検出した第一次大極殿と推定されている地区の南面中央門SB7801とこれに取り付く築地回廊SC5600から、SB9200までの南北距離が約960尺（285m）となることが確定した。ここで720尺と960尺を1.2で除すると600

第4図　6284－6668組合せ

尺と800尺という数値が得られることは注目に値する。

今回の調査で朝堂院南門地区では5時期の変遷があり、特に門については中断期をはさんで建て替えられていることが明らかになった。即ち、A期は下ツ道の側溝を埋めた後、掘立柱塀SA9201A・SA9202Aでこの地区を閉塞する。B期はSB9200・SA9201B・SA9202Bが構築されてこの地区が最も整えられる時期である。C期になるとSB9200は破壊され、小さな掘立柱建物2棟とそれをつなぐ塀SA9191で閉塞される時期となる。次いでD期には門SB9205が建てられるが、この門はSB9200よりひとまわり小さくなる。E期はこの地区の終末期で、幅約28mの間隔を保って南北溝2条が流れるのみとなる。

これらの各時期の絶対年代を決定する資料は得られなかったが、おおむねA期は8世紀初頭、B期は8世紀前半、C期は8世紀中頃、D期はC期以後奈良時代末まで、E期が9世紀初めの平城上皇の時期に比定することができる。ここでB期の終り、即ちSB9200の廃絶をいつにするかということが問題であるが、B期存続の時期が恭仁遷都の時期に当っていることは充分考慮する必要がある。



第5図　第119次遺構変遷図